

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：16301

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K18418

研究課題名（和文）近代日本の捕虜処遇と大正・昭和初期におけるその変容に関する政治史的考察

研究課題名（英文）The Treatment of Prisoners of War in Modern Japan and Its Transformation in the Taisho and Early Showa Periods

研究代表者

梶原 克彦（Kajiwara, Katsuhiko）

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：10378515

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,200,000円

研究成果の概要（和文）：近代日本の捕虜政策は昭和期の虐待と明治・大正期の厚遇という対照性を有しているが、本研究では「厚遇と冷遇の間」である第一次世界大戦末の1918年から日中戦争が始まる1937年の間における3つの武力衝突（シベリア出兵・山東出兵・満州事変）での捕虜処遇の検討を試みた。最も研究を進めることができたのはシベリア出兵期についてであり、ベルヴァヤ・レーチカをはじめとする収容所管理下での処遇が適切であったことが資料で確認され、在シベリア捕虜の救済・送還事業と共に捕虜問題に国際法・国際機関と共同する姿勢が看取できた。収容所外での捕虜問題ならびに山東出兵・満州事変期の捕虜処遇については今後の研究課題となっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の挑戦的研究としての意義は、第一に近代日本の捕虜政策における変化を描き出すと試みる点にある。従来その実態がほとんど知られていない時期を明らかにすることで、「厚遇」から「冷遇」へ転じた原因を明らかにし、捕虜政策研究史上の断絶した二つの時代を架橋せんと試みた。第二に、本研究は歴史認識問題への寄与という意義も有している。とくに日露戦争・第一次大戦期の厚遇と第二次大戦期の劣悪な待遇は、日本像の顕彰と断罪との間で、国内や、日本と関係国との間に歴史認識の大きな隔たりを生み出している。本研究は二つの「対照的」な時代の間隙を埋めることで、歴史認識の対話への貢献も挑戦的な意義として有している。

研究成果の概要（英文）：The modern Japanese POW policy contrasts the mistreatment of POWs during the Showa period with the generous treatment of POWs during the Meiji and Taisho periods. This study attempts to examine the treatment of POWs during three conflicts (Siberian Intervention, Shandong Expedition, Manchurian Incident) between the end of World War 1 and the Sino-Japanese War, that is, in the period "between generous and ill treatment". We were able to make the most progress in our research on the period of the Siberian Intervention and to confirm from the historical documents that the treatment of POWs in the POW camps was appropriate. We could also see the attitude of cooperation with international law and international organizations on POW treatment along with the relief and repatriation projects for ex-Central Powers POWs in Siberia. But the POW issues outside the camps, as well as the treatment of POWs during the Shandong Expedition and the Manchurian Incident, are still subject to further study.

研究分野：政治史

キーワード：捕虜

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで在外研究や海外での講演、海外学会報告において日本人以外の聴衆に対し、日露戦争および第一次世界大戦(日独戦争)における捕虜処遇について講演・報告を行ってきた。そうした機会に「そうした厚遇がどうして酷い扱いをするようになってしまったのか」という質問がしばしば提示された。一方で、同様の講演・報告を国内で日本人の聴衆を相手に行った場合には、「虐待ではなく、厚遇したこともあったことに驚いた」「酷い事ばかりやっていた訳ではなかった」という感想が多かった。つまり捕虜処遇を巡り、日本人以外の関心は明治・大正期よりも昭和期に向かうのに対して、日本人の関心は昭和期よりも明治・大正期に向かいがちであり、そうした姿勢はややともすれば前者は虐待の批判に、後者は厚遇の顕彰となり、共通理解を阻む価値対立に終始してしまうだろう。

本来、捕虜の処遇は、武器を片手に恐怖と敵意を抱き、相手を殲滅しようとする人々が戦争の中であってどれほど理性的であり得るのかという普遍的な問いかけを含んでおり、現代でも取り組むべき未解決の問いである。また捕虜処遇を含む歴史認識問題はとかく主観的・感情的に議論されがちであるが、だからこそ歴史研究は何が起きたのかという点を徹底的に実証的に明らかにし、議論を可能にする客観的な素材を提供すべきではないかと思われた。本研究を構想した背景と経緯はこれらの点にあり、本研究が、厚遇の事例研究と虐待の事例研究に寸断された現在の研究状況を批判的に捉え、双方の連結点にあると思われる事例に取り組み理由もここにあった。

2. 研究の目的

近代日本の捕虜政策は昭和期の虐待と明治・大正期の厚遇という対照性を有している。結果、第二次大戦時の捕虜処遇は、今なお日本と旧交戦国の間にしこりを残す問題なのに対し、日露戦争・第一次大戦期のそれは日本側では「国際交流」事例や顕彰の対象にさえなっている。

捕虜の虐待と厚遇という対照的な近代日本の捕虜政策に関して、先行研究は1930年代末の日中戦争とノモンハン事件を処遇変化の端緒として取り上げている。双方の事例の特徴は、第一に両戦争では解放された日本人捕虜への自決強要など、武士道的な捕虜を恥とする姿勢が確認されたことである。第二に、両戦争とも宣戦布告無き戦争であり、国際法上は宣戦布告後に捕虜保護の義務が生じる為、「捕虜」が発生しない状況だった。第三に、両戦争は本土ではなく戦場で捕虜を管理しており、これは現場と軍中枢との方針の齟齬や、民間人と兵士の判別困難という問題を引き起こし、捕虜殺害の遠因となった。ところでこれらの「捕虜観の変貌」「人道主義の軽視」「戦場での捕虜管理」はいつ生じたのか。武士道的な考えは日露戦争時にもあり、捕虜を恥とすることで日本人捕虜を帰国後に村八分にした一方、「武士の情け」として厚遇を支える条件でもあった。また日中戦争時にも参謀本部はガイドラインを発し、捕虜の人道的処遇に注意を払っていた。さらに戦場での捕虜判別の困難は日清戦争(旅順)にも日露戦争(サハリン)にもあり、捕虜殺害も発生していた。このように厚遇期と冷遇期双方には類似する要素があることから、捕虜処遇の転換を説明するには、双方の違いを検証するだけでなく、とくに厚遇期から冷遇期への移行期間をつぶさに見る必要があると思われた。

従来、捕虜処遇の転換そのものに答えた研究はなく、明治・大正期の処遇と昭和期のそれについて見解は懸隔したままである。そこで本研究では、従来未検討の「厚遇と冷遇の間」、すなわち第一次世界大戦末の1918年から日中戦争が始まる1937年の間における3つの武力衝突、シベリア出兵(1918年~1922年)・山東出兵(1927年~1928年)・満州事変(1931年~1933年)での捕虜処遇を検討し、捕虜処遇の転換点に位置すると思われる時期の処遇の様子を明らかにしようと試みた。また、これらの事例における「日本の捕虜観」「国際法と人道主義の認識」「捕虜管理システム」という要素も検討することで、捕虜処遇史上のミッシングリンクを明らかにし、歴史認識問題に対して、厚遇の顕彰でも、虐待の断罪でもない、客観的な事実関係の素材を提供できよう。

3. 研究の方法

本研究は何よりも史料に基づく客観的な実証分析に立脚する。捕虜の処遇問題は主観的な価値判断を挟みがちであり、容易に善悪の問題へと転化する恐れがある。これを避けるためには、誰もが参照できる客観的な資料をベースに議論を進める必要がある。史料は公刊史料、文書館史料、新聞記事、手記を総合的に利用する予定とした。

一方で、本研究の主眼は、厚遇と冷遇をめぐる「近代日本における捕虜政策上のミッシングリンク」を解明することにある。それゆえ、本研究で取り上げる事例をその前後の事例と比較し、研究上の空白期間だった時期の捕虜政策を総合分析する。その際、従来の研究で捕虜の厚遇や冷遇を説明してきた「日本の捕虜観」「国際法と人道主義の認識」「捕虜管理システム」の3つの項目で通時的にも共時的にも分析を行うこととした。

4. 研究成果

近代日本の捕虜政策は昭和期の虐待と明治・大正期の厚遇という対照性を有しているが、本研

究では「厚遇と冷遇の間」である第一次世界大戦末の1918年から日中戦争が始まる1937年の間における3つの武力衝突（シベリア出兵・山東出兵・満州事変）での捕虜処遇の検討を試みた。最も研究を進めることができたのはシベリア出兵期についてであり、ペルヴァヤ・レーチカをはじめとする収容所管理下での処遇が適切であったことが、陸軍の資料だけでなく、デンマーク赤十字社やアメリカYMCAなどの資料でも確認され、在シベリア捕虜の救済・送還事業と共に捕虜問題に国際法・国際機関と共同する姿勢が看取できた。しかし、収容所外での捕虜問題は、日露戦争時にも日中戦争時にも共通する問題であったが、今回の研究期間ではこうした捕虜管理システムにまつわる問題を追うことができず、今後の課題として残された。

国際法と人道主義の認識については、山東出兵の調査の中においても、プロパガンダとしての性格は否定できないものの、陸軍がこれに配慮していたことは一部史料で確認できた。また満州事変については、宣戦布告なき戦争のゆえに捕虜情報局の設置の必要を認めなかったことには、パリ不戦条約以後の戦争違法化という流れにおいて、国際法遵守に対する人道主義の形骸化とも見なし得る状況が登場している。これはシベリア出兵期において、費用の問題が大きかったと思われるが、捕虜管理をあくまで国際共同管理の枠内で完結させようとし、国際赤十字社や連合国の要請に必要以上に応えなかった姿勢にも通じており、今後、さらに検討が必要とされる点である。

日本の捕虜観については、対象とする時期をさかのぼって検討を行い、日清戦争での処遇状況から検討し直すことを試みた。清国兵捕虜を見下す姿勢は、捕虜を臆病者として蔑む姿勢から生じており、武士道の議論と通じる姿勢をすでに確認でき、日本人を開化した側と位置付けることと相まって顕著であった。しかし、中国文化への尊敬から敬意をもって清国兵捕虜を遇した事例もあった。したがって、清国兵はアジア系であるがゆえに手酷く扱われたという考えに一定の留保を迫るものであるが、他方で、国際法の要請により仕方なく捕虜を適切に扱うという姿勢も看守でき、人道主義が目的ではないという捕虜観の特徴がさかのぼって確認されることになった。

コロナ禍が継続したことで、海外資料調査を主として、計画していた資料調査が十分に出来なかったこともあり、とくに山東出兵・満州事変期の捕虜処遇については未解明の部分が多く残されており、上記の見地を踏まえてさらなる検討を継続する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 梶原克彦	4. 巻 49巻1・2号
2. 論文標題 三間隆次のみた万国書籍印刷業博覧会(BUGRA)(二・完)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛媛法学会雑誌	6. 最初と最後の頁 1 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶原克彦・奈良岡聡智	4. 巻 53
2. 論文標題 第一次世界大戦と在独日本人の抑留問題(七)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集 社会科学編	6. 最初と最後の頁 1 - 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶原克彦・奈良岡聡智	4. 巻 54
2. 論文標題 第一次世界大戦と在独日本人の抑留問題(八)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集 社会科学編	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奈良岡聡智	4. 巻 第192巻1-6号
2. 論文標題 近代日本における『理念的外交』 - 第一次世界大戦期を中心に -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法学論叢	6. 最初と最後の頁 218-248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶原克彦、奈良岡聡智	4. 巻 52
2. 論文標題 第一次世界大戦と在独日本人の抑留問題(六)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛媛大学法学部論集 社会科学編	6. 最初と最後の頁 1 - 33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶原克彦、奈良岡聡智	4. 巻 51
2. 論文標題 第一次世界大戦と在独日本人の抑留問題(五)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学法学部論集 社会科学編	6. 最初と最後の頁 1 - 33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶原克彦	4. 巻 48巻1・2号
2. 論文標題 三間隆次のみた万国書籍印刷業博覧会 (BUGRA) (一)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛法学会雑誌	6. 最初と最後の頁 1 - 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森靖夫	4. 巻 73(2)
2. 論文標題 史料解題・翻刻 横田章陸軍主計正講述『軍需工業動員概説』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社法学	6. 最初と最後の頁 397-455
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森靖夫	4. 巻 -
2. 論文標題 書評・関口哲矢『強い内閣と近代日本』（吉川弘文館、2020年）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 梶原克彦
2. 発表標題 マツヤマと世界大戦 松山収容所の通時性と共時性におけるドイツ兵捕虜
3. 学会等名 ドイツ現代史研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奈良岡聡智
2. 発表標題 近代日本における『理念的な外交』 - 第一次世界大戦期を中心に
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsuhiko Kajiwara
2. 発表標題 Intercultural Contact and its Effect on the Image of "Foreigners" in Host Society: Case Study of the German POWs in Japan during WWI
3. 学会等名 IPSA 26th World Congress of Political Science (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Katsuhiko Kajiwara
2. 発表標題 German Prisoners of War in Japan and the Regional Development during the First World War
3. 学会等名 The 13th World Congress of RSAI (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森靖夫
2. 発表標題 日本の総力戦体制
3. 学会等名 第2回日中若手研究者フォーラム、復旦大学主催・東芝国際交流財団後援
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 川成洋、菊池良生、佐竹謙一	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 814
3. 書名 ハプスブルク辞典(「オットー・ハプスブルク」担当)	

1. 著者名 太田出・川島真・森口(土屋)由香・奈良岡聡智	4. 発行年 2023年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 416
3. 書名 領海・漁業・外交 19~20世紀の海洋への新視点(執筆担当部分165-218頁)	

1. 著者名 山口輝臣・福家崇洋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 325
3. 書名 思想史講義 戦前昭和篇（担当 第13講 「国家総動員論」（263～277頁））	

1. 著者名 梶原克彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 愛媛大学リサーチユニット「グローバル地域研究」	5. 総ページ数 61
3. 書名 『海南新聞』松山俘虜収容所関連記事集成 明治二十七年七月 明治二十八年十月	

1. 著者名 川島真・岩谷將（森康夫：第4章担当）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 -
3. 書名 日中戦争研究の現在：歴史と歴史認識問題	

1. 著者名 筒井清忠	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 508
3. 書名 大正史講義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	奈良岡 聡智 (Naraoka Sochi) (90378505)	京都大学・公共政策連携研究部・教授 (14301)	
研究分担者	森 靖夫 (Mori Yasuo) (50512258)	同志社大学・法学部・教授 (34310)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関